

通りすがりの王子 2

目次

通りすがりの王子 2

5

戦うお嬢様

275

通りすがりの王子 2

プロローグ

少しウェーブした明るい茶色の髪が、背中で跳ねるのを感じる。あちこちに配された鏡に、先を急ぐ私、加藤千速の大きな猫目と、いつもより上気した顔が映っては消えてゆく。

平均よりもやや高め身長の、一見ハーフっぽいこの容姿。それに神世建設社長令嬢という肩書きが加わることで、私はとにかく誤解されやすかった。——高慢で、気の強そうなお嬢様だと。

そんな偏見から逃れ、ただ自分の実力だけで認められたいと、親のコネなどない桜井コーポレーションを就職先に選び、外見も地味に装ってきたというのに。

私は苦々しく、ネイビーのワンピースと、フェミニンなコートを見下ろした。でもまあ、この程度なら、何とか誤差の範囲内……かな。

荷物を抱えてホテルのエントランスを駆け抜け、十二月の弱々しい朝の光の中に飛び出す。ロータリーに停まっていたタクシーに乗り込み、急いで行き先を告げた。多分、ぎりぎり始業に間に合うだろう。私はようやくほっと息つき、物思いに耽る。

——運命とは不思議なものだ。

八年前。十八歳だった私は、とある社交パーティーに出席していた。そこで襲ってきた男を手刀でオトして、危うく難を逃れたのだが……。偶然その一部始終を目撃していた自称『白馬の王子』がいた。その『王子』こと森瑞穂と、まさか桜井コーポレーションの入社式で再会しようとは。そしてよりによって同僚として働くことになるうとは。さらには、やたらと有能で人を寄せ付けない『王子』と、こんな関係になるうとは……

皮肉っぽい笑みを浮かべた『王子』を振り切った八年前の私は、そんなこと予想だにしていなかった。

気怠い身体をタクシーの座席に預けながら、私は密かに決意する。

たとえ、こうなることが運命だったとしても。近いうちに、絶対、ひとこと物申してやる。もちろん瑞穂に、だ。

本日は、瑞穂の父が社長を務める森羅グループのクリスマスパーティーから二日後の、月曜日。おととい、私は久々に再会した瑞穂に、突然『婚約者』として表舞台に引っ張り出された。挙句、「帰れると思ったのか？」と不敵に笑う瑞穂にスイートルームに連れ込まれ、今、ホテルから出勤するはめに陥っているのだ。

私の「聞いてないんですけど？」という不満は、瑞穂の熱であやふやにされてしまい、結局本人にぶつけることが出来ないままだ。

彼の父が倒れたことにより突然桜井コーポレーションを去り、森羅に戻ってしまった瑞穂とは、

一年の間、直接会えなかった。だからお互いに思いを募らせるばかりだったとは思う。でも、だからといって、一年の空白をこんな形で埋めようとする!?

しかも。

私は左手の薬指を目の前にかざした。キラリ、と輝くのは、華奢なリングにセットされた存在感のある一粒ダイヤ。婚約といえバラストアイテムの指輪がそこに納まっている。しかし、何の言葉もなく「いつの間にか嵌められていた」なんてことは許されるのだろうか? いや、そうじゃないわよね。言葉はあった。

指輪を睨みながら、私は呟く。

「――『保険』って、どういうこと?」

1 その後の日常

ランチプレートの前に、千速は小さくため息を吐いた。

朝、営業フロアに始業ギリギリで飛び込んだ時の静寂と、自分に向けられた視線、そしてその後の騒ぎときたら……。正直、甘く見ていたのだ。いつものグレーのスーツではないとはいえ、ネイビーのおとなしめのワンピースならば誤差範囲じゃなかるうか、と。確かに、いつものようにきちり髪を結ぶことはせず、眼鏡もかけてはいなかったけれど。

今も、社員食堂のあちらこちらから視線が飛んでくる。そのあまりの多さに、ちりちりとした痛みさえ感じるほどだ。

「で? なんでその格好?」

谷口実里が、この状況を完全に面白がりながら、からかうように尋ねてきた。

彼女は千速と同期で、秘書課に所属している。千速が内勤の時と一緒にランチをとることが常であり、本日も秘書課の情報網に引つ掛かった「ネタ」である千速を、社員食堂の入り口でニヤニヤ笑いながら待っていたのだ。

千速は、皿の上のアジフライをひっくり返しつつ頬を染める。

「パーティーがあつて、その後色々あつて、家に帰れなかった」

「……帰れなかった、ね」

千速は、ますます赤くなつた。

「何があつたのか、聞いていいものかどうか悩むわねー。耳に毒っぽくて。でも」

実里は、くくく、と笑いながら、千速の右手を掴んだ。

「もつと大事なこと、あつたんじゃない?」

「……大事なことっていうか、本人の関知しないところで勝手に謀られてたっていうか」

モゴモゴと口にする千速の右手薬指には、目新しいシンプルなリングが嵌められている。実里がその右手をくるり、とひっくり返すと、掌に結構な大きさの一粒ダイヤが煌いた。

「これって、嵌める手と、向きが違わない?」

「こんなのつけて、仕事出来ないもの。かといって、外したらなくしそうだし」
 そんなやり取りをしている千速たちのところへ、食事を終えたらしい同期の常盤司が、ふらりと近付いてきた。彼は企画部に所属している。鋭い知性をのほほんとした雰囲気と語りで隠し、周囲を煙に巻くなかなかの策士だ。そしてまた千速の大学の同期でもあって、地味に生活しようと奮闘する千速をずっと面白そうに眺めつつ、協力してくれた友人でもある。

この読めない男は千速の横で立ち止まると、実里に掴まれた右手と、その掌に煌めくモノに視線を落とした。それから、周囲をぐるりと見回した後、千速に向かってにっこりと微笑んだ。

「やだ、何、その笑顔」

千速が引き攣った顔でそう言うのと、司は徐にその右手をひよいと掴んで指輪を引き抜き、今度は左手を掴んでその薬指に嵌めた。そして、きよとんとしている千速に構うことなく、突然こう声を上げたのだ。

「いいー？ コレ、悪いけど売約済みだからー」

左手の指輪を周囲に見せつけるように、千速の手を印籠よろしく高く掲げる。

「僕んじゃないんだけどー」

そう付け加えることも、もちろん忘れない。

その後、「全く瑞穂は何考えてんだかね」とブツブツ呟きながら、騒然とする社員食堂を悠然と去って行った。呆然とする千速をその場に残したまま。

実里は、半ば口を開いてその後ろ姿を見送った後、口許をきゅつと引き上げてニヤリと笑った。

「やるわねー。煩いのが押し寄せる前に先制のジャブ」

「押し寄せるって……」

「アンタ、しばらく集団に埋没しているうちに危機管理が甘くなってるんじゃない？」
 「う」

「まあ、司と私の友情に感謝するのね。変な手間かけずに『売約済み』情報が流れるわよ」

「それって……」
 「秘書課の力を侮ることなかれ」

実里は人差し指をびつと立てた。

「まあ、相手が誰か、そこんこは追及されるかもねー。あ、お兄さんとか使っちゃえばいいんじゃない？ 今日、会社の真前で『銀の君』といちゃいちゃしてたらしいじゃない」

千速は、こめかみを指で押さえた。

シルバーの目立つ外車に乗り、シルバークレームの眼鏡をかけた伶俐な印象の兄、竜海は、以前から「通りかかった」と称して、千速を勝手に迎えに来ることがあった。そのため、桜井コーポレーション界隈で目撃されることも多く、その際立った容姿や雰囲気から「銀の君」と女性社員に呼ばれていたりするのだ。

そういう兄は今朝、千速のビジネスバッグを届けに来てくれたのだが、周囲の視線に全く無頓着な様子でエントランス前に立っていたのだった。確かに会話は交わしたが、いちゃつくとは……
 「それ、喜んでいいのか、怒っていいのか、わからない」

千速は力なく呻いて、ランチプレートを押しやった――

翌日には、当然千速はノーマルモード、いわゆる「薄墨の君」仕様に戻った。外見や自分の背景で評価されたくない――そんな思いから、千速は入社以来、地味なグレーのスーツと銀縁眼鏡、ひつつめ髪で通してきたのだ。そのやり方を今更変えるつもりはなかった。

そうはいっても、年末の数日間はそれなりに好奇心に満ちた視線を浴びることになった。だが、同期の有難い友情の成果と、仕事納めの忙しさもあつてか、千速が直接問い質されることはなかった。

何か尋ねたような素振りを見せる者もいるにはいたが、千速自身は何も語るつもりはない。それが伝わるが故か、踏み込まれずにすんだ。従って、千速のお相手は「銀の君」ということになっているようだ。千速も敢えてそれを訂正しない。瑞穂の名前がちらとでも挙がった途端、今度はまた別の面倒な展開が待ち受けているのは、明白だからだ。

そういうわけで、思うところは多々あるが、年が明けてからも千速は通常営業中である。これまでと同様に日中は社外を飛び回り、帰社後には書類作成に追われる日々だ。

昨年から何度も訪問し、販売契約を目指して営業をかけている企業は、若い女性に受けそうな繊細なデザインのガラス製品を得意としている。品質にこだわり、大量生産を良しとしないため、元々の設定価格も高めた。そこに桜井コーポレーションと競合する商社が介入して、なかなかこ

ちが思った通りの価格設定に近づかない。本気でその競合商社と取引するつもりがあるのか、はたまた、それを利用して桜井との取引を有利に運ぼうとしているだけなのか、相手企業の思惑もはっきりしない。

ノートパソコンを見つめたまま、千速は指先でトントンと書類を弾く。

こんな時、無意識に考えるのは、「瑞穂ならどうするか」だ。瑞穂は今、桜井コーポレーションを離れ、森ホールディングスで後継者として身を立てるべく邁進中だ。千速の傍にいたわけではないが――こういう瞬間に、何となく瑞穂の存在を感じる。入社以来、ずっと一緒に営業畑を歩いてきたのだ。ライバルでもあった彼のやり方は良くわかつている。

まずは、そこまで労力をかけるに見合う取引となるのか、その辺りの再確認。

次いで、その価値があるならば、どう攻めるか――正攻法で押し詰めて、引いて駄目とくれば、彼ならどうするか。

瑞穂ならば、背後を突く。

千速は不遜に笑って、ディスプレイの数字を追い始めた。

それを見た、隣の席の後輩、須藤拓真が呟く。

「うわ、加藤さん。その笑い方、森さんそっくりです」

「……何か言った？」

「い、いえ、気のせいだと思います……」

千速は集中して、その企業の過去のデータを調べ上げた。

商品の価格や取引量が明かれないのならば、その周辺部分から攻めてみる。例えば、販売網とか。あるいは、商品開発の方に舵を切って更に付加価値をつけるとか。単純な仲介業なら競合商社が入り込む隙があるかもしれないが、桜井の販売網と企画力には敵わないはずだ。

企画書と、見積提案書を一気に書き上げる千速だったが、ノートパソコンに「貨物保険」と入力した後、手が止まった。

——保険。

千速の意識が、目下の懸案事項から、するりと離れた。

ブラウスの下で揺れている、瑞穂が言うところの「保険」を服の上から指でなぞる。仕事中はネットワークスに通して身につけているこの指輪が意味することは、ただひとつ……のはずだ。

でも、「保険」？

よりによって、婚約指輪を贈る時に言う言葉が、「保険」？

正確に言えば、「贈られた」わけさえなく、気付いた時には既に「嵌められていた」のだけれど。もっと他にやりようがあったのでは？

だって、一年ぶりに再会したんだもの。

そしてまた、長い未来への約束なんだから。

ふつふつと湧き上がってくる不満を宥めようと、千速は大きくため息を吐いた。集中が途切れてしまった。とりあえず、攻める方向が定まったことを良しとして、一旦作成した文書を保存する。

それから、徐に須藤の方に顔を向けた。

彼は隣の席から、千速が瑞穂と付き合うことになる過程をずっと見ている。こんな結末が待っているとは思いもしなかったのに、千速も、特にそれを隠してこなかった。

「須藤君」

何故か、しまったという顔をした須藤が、上げかけていた腰を椅子に下ろした。

「……はい、何でしょう」

「指輪って、やっぱり意味があるわよね？」

「さっきまで、シニカルな表情でパソコンを叩いていたのに、突然それですか。まあ、加藤さんらしいですけど」

須藤は呆れながらも、若干説明不足な千速の質問に、少し考えるような表情を浮かべて答えた。

「そりゃ、あるんじゃないですかね」

「……そうよね」

「そこで切るんですか？　そこで切ったら気になるじゃないですか」

再び考え込んだ千速に、須藤は「仕方ないですね」と続けた。

「指輪は、そう簡単にプレゼント出来ませんよ」

そう言って、千速の今は何もつけていない左手を、ちらりと見た。

「加藤さんだって、あの指輪をもらった時に、何かひとつ言われたんじゃないんですか？」

——そうよね！　普通そうよね！

くるりつと勢いよく椅子を須藤に向けて、千速は身を乗り出して訴えた。

「それがね。目が覚めたら、嵌めてあったの」
須藤は仰け反り、「目が覚めたら……」と呟きながら赤面した。だが、千速はそれに構わず更に続ける。

「でね、ビックリして暫く眺めていたら、『それは、保険だ』って言われたのよ。私だって馬鹿じゃないから、あの指輪がどんな意味をもっているかくらい、わかります。わからないのは、『保険』のほうで」

美しい微笑みを浮かべて、指輪に唇を寄せた瑞穂――

一瞬思考があらぬ方へ流れたのを、千速は慌てて軌道修正した。

「それって、指輪を贈るのに、正しい言葉だと思う？」

須藤は、ぐ、と詰まった様子を見せた後、千速の顔を覗き込んだ。

「つまり、加藤さんとしては、指輪自体がどうこうじゃなくて、言葉の選択に、疑問を感じていると？」

「そうっ！ 何、『保険』って。私が心変わりしないための保険ってこと？」

「そうよ、納得出来ないんですけど。」

千速は須藤ににじり寄って、眉を顰めて訴えた。

「っていうか、その渡し方にも、問題アリじゃない？ 私、YESもNOも言ってないもの。もしNOだったらどうするつもりだったのかしら？」

まるで、そうすることが当然のように嵌められた指輪――

すると今度は、須藤が盛大なため息を吐いた。

「あのですね。『保険』ていうのは、他の男が加藤さんに手を出さないようにっていう意味での『保険』ですよ。アナタ、心変わりなんて、ハナから許されてないんですよ」

それから、「誰が相手だと思ってるんですか、全く」と付け加えた。

そりゃあ、あの俺様ですけど、と思いつつ、千速は少し拗ねた口調で尚も言い募った。

「……お伺いぐらいたてるのが、筋つてもんじゃない？」

口許を引き攣らせた須藤が、今度こそヨロヨロと席を立った。

「砂糖を吐きそうです、僕は……」

「砂糖？」

「いえ、こっちのハナシです。少し糖分抜いてきます。コーヒーをブラックで流し込んだら、すぐ戻りますから」

そして、「惚気るのは、どこか他所で頼みますよ……」とひとりごちて千速に背を向けた。

ブツブツ呟きながら去っていく須藤の後姿を、千速は不満気に見送る。

「惚気てなんかいないんですけど」

どう考えても、何か間違っているでしょう、と主張したいだけなんですけど。なのに、誰もわかってくれない。実里も司も、不満を訴える千速を、生温い視線で眺めるばかりで。

ある意味、言葉よりも確かなものを手に入れながら、まだ言葉を欲しがるのは愚かなことなのだろうか、と千速は自問する。

しかし、一年待てたのは——不安に思いながらも、瑞穂を待ち続けることが出来たのは、「必ず一年で迎えに来る」という言葉があったからだ。なかなかお互いの時間の融通が利かないのだから、言葉で繋ぎとめられたいと思っても、間違いないじゃないでしょうか？

千速は釈然としなない気持ちを抱えたまま、再び見積提案書の作成に取り掛かるべく、パソコンに向かった。

そんなことがあった数日後である。

「まだ仕事中か」

突然瑞穂から、電話が掛かってきた。

「出てこられるか」

「今から？」

千速は手元の時計を確認した。午後六時。平日は遅くまで仕事に追われている瑞穂から、こんな時間にお誘いとは珍しい。

クリスマス前の婚約発表からこちら、二人で会うことに何の支障もなくなったわけだが、実際のところ、多忙な瑞穂とは休日に会うこともままならない。相変わらず、メールと電話でのやり取りが続いているのだ。

「まあ、打ち合わせもないし、切り上げて出られるけど」

「よし。三十分後に例のコンビニで待っている」

おい！ どこに行くとか、ひとことないのか！

通話が切れたスマートフォンを千速が睨んでいると、須藤がノートパソコンのキーを叩きながら、のんびりと呟いた。

「いいなー。デートのお誘いですかっ」と

『誘い』ってというのは、どこそこに行きませんか？ って尋ねることなんじゃないの？』

須藤はパソコンの画面から目を離さずに、くくく、と笑う。

「加藤さんは、森さんに何を求めているんですか？ そんな、予め備わってない機能を、森さんに求めたって無駄です。『誘いが来た』ってことが重要で、そういうセリフだったかなんて、些末なことでですよっ」と

キーをポンと軽やかに叩いて、須藤が千速の方に顔を向け、にっこり笑った。

「というわけで、お疲れ様でした。いってらっしゃい」

「……お先に。行ってきます」

フロアを後にしながら、千速は考える。

エントランスの真ん前に車を着けることだって出来るのに、千速の会社での立場を配慮して少し離れたコンビニを指定する。それなのに、行き先を告げて、「行かないか？」という言葉の口にすることはしない——

いや、どうせ行くんですけどね。誘われれば、やっぱり嬉しいもの。その辺を見透かされているようで、少し面白くないけれど。

コンピニの駐車場には、既に黒いスポーツカーが停まっていた。歩み寄ってドアを開いた千速に、瑞穂が「お疲れ」と声を掛け、微笑む。仕事中はきっちり上げられている髪が乱れて額にかかり、ネクタイも緩められている。

「瑞穂もお疲れ様。珍しいね、今日は」

いつも隙のない装いをしている瑞穂が、こんな風に武装を解いた様子は、何となく色っぽい。思わずじつと見つめてしまう。

「何？ 見とれるなよ」

「見とれてなんかっ！」

ふふん、と笑って瑞穂は言う。

「急に時間が空いた」

急に時間が空いたから、会いたいと思ってくれた、ということだよ。

もしかしたら、私には瑞穂専用の言語補完機能が備わりつつあるのかも——苦笑して、千速は座席に身体を沈めた。

「どこに行くの？」

「初詣」

「……初詣って」

「すぐだから。飯はその後にしよう」

やや混雑する道を車で二十分ほど走ると、どうやら目的地に着いたようだ。

都内の比較的有名な神社であるが、松の内も過ぎた今では——まして、こんな時間では、人影もまばらだ。

「どうしてここに？」

車から降りて、千速が尋ねた。

それには答えず、瑞穂が車を回ってやってきて、千速の手を取る。

「冷たいな。手袋は？」

千速は少し俯いて、瑞穂の手をきゅつと握った。

「あるよ。でも、しない。人目を気にしないでいい時くらい、ちゃんと手を繋ぎたい」

足を踏み出しかけていた瑞穂が、動きを止めた。それから千速と繋いだ手を、自分のコートのポケットにぐいと突っ込んで、歩き始めた。

心なしか、頬が赤いような気がする。

「……瑞穂照れてる」

「煩い」

瑞穂の歩調が少し早まる。千速は早足でそれに付いて行きながら、くす、と笑った。

「——去年」

灯籠が並んだ参道で、瑞穂が呟く。

「恵吾とここに来た。あの頃は、今と比べようもないほど忙しくて、余裕がなくて。でも、験担ぎで初詣に行こうということになった。深夜だ」

時田恵吾は、瑞穂の秘書であり従兄でもある。早い段階から、自分は旗振り役の器ではないと言って、瑞穂の補佐に回ることを公言していた。その言葉通り、今回の森羅の危機ともいべき事態に彼は瑞穂を助け、共に奮闘した。いわば瑞穂の懐刀だ。

瑞穂が、千速の方に振り向く。

「この神社は二十四時間開門しているんだ。人間の願い事を二十四時間受け付けてくれるだなんて、勤勉な神だと思わないか？ 勤勉な俺たちにはぴったりの神だと、恵吾が笑っていた。まあ、受け付けた願いを全て叶えているわけじゃないにしても、耳を傾けてはいるということだろう？」

本殿の前で繋いでいた手を離し、賽銭を用意して瑞穂は笑った。

「だが俺の願いは叶った。だからその礼と、次なる願いを」

賽銭箱に小銭を入れ、鈴を鳴らし、拝礼する。

千速もその隣で、同じようにした。

参道を戻りながら、二人は再び手を繋ぐ。

「瑞穂は去年、何をお願いしたの？」

「そうだな、失せ物の奪還、かな。今年は、その確保」

「そんなに、何か失くしているわけ？ 時田さんがついているのにな？」

「足が付いているんだよ、ソレには」

わけがわからない、という表情の千速に苦笑しながら、今度は瑞穂が尋ねた。

「千速は今、何を願った？」

「ん？ 言語補完機能の装備」

「……俺は、時々お前の考えていることと言っていることが、全く理解出来ない」

「それはお互い様だから」

千速が口を尖らせて、ぶん、と繋いだ手を振った。

「甘酒、飲みたかったなあ」

鳥居をくぐったところで千速が立ち止まった。脇にある甘味処は当然、もう閉まっている。

「次は、ここが開いている時間に来よう」

千速は、ふ、と噴いた。新年早々、もう翌年のことを口にするなんて。

「それは、もしかして来年の初詣の話？ 今、鬼が腹を振って指さして笑ってると思う」

「何とでも言え」

瑞穂のヘソが少し曲がった。

繋いだ手をぎゅっと握って、千速はそんな瑞穂の顔を覗き込む。

「そんな先にも、一緒にいられることが前提の話が出来るようになって嬉しい、かな」

言葉を見失ったかのような瑞穂に、ふふふ、と笑いかけると、千速は、お腹空いたーと瑞穂を引っ張ろうとした。しかし、逆に引き寄せられて、後ろから強い力で抱き締められた。

「瑞穂？」

「——もつと先もだ」

首元で囁かれた声は、くぐもって千速にはよく聞き取れなかった。

「何？ よく聞こえなかった」

「……何を食べたいか、聞いたんだ」

首元に回された腕をタップして、千速が声を上げた。

「あのねっ！ 是非行ってみたいところがあるんだけど——」

* * *

オレンジの看板の牛丼チェーン店の駐車場で、瑞穂はため息を吐いた。

「ここでもいいのか？」

「うん！」

「……何でまた」

千速は、運転席の方に身を乗り出して言った。

「瑞穂は男だから、わからないのよ。ひとりで牛丼チェーン店に入るの、さすがに少しハードルが高いの。竜兄は、口に合わないから行って行ってくれないでしょう？ 実里は、お持ち帰りじゃ味が落ちるから、店で食べなくちゃって言うくせに、せっかく千速と食事するならそこは嫌とか言って一緒に行ってくれないし」

ワクワクした表情で店に向かう千速を、瑞穂は追う。

髪をきつくひとつにまとめ銀縁の眼鏡をかけ、隙のないキャリアアウーマンといった風情の千速

は、店内でやっぱり浮いている。隣の出来る男感満載の瑞穂も同じである。そしてまた、この二人が一緒であるということが、尚更人目を引く——どういふ関係なのだろう、と。

しかし二人は、ちらりちらりと投げかけられる視線には全く動じずに、目の前の牛丼に箸をつけている。

「そんなに期待するほど、美味いわけじゃないと思うが」

ボソリと呟く瑞穂に、千速が答える。

「それだって、食べたことがあるから言えるセリフでしょ。私は今日初めて食べて、あ、なるほど、こういうものなのね、と納得しました」

千速が綺麗な所作で箸を置き、ご馳走様、と食べ終わったところで、瑞穂は切り出した。

「——で？ 何があった」

びくうと千速が身を強張らせる。

「何が、とは？」

「何で突然牛丼？」

「単なる興味……」

「じゃないよな」

「……はこ」

そんなことに気付かない瑞穂ではない。

「実は……」

と、千速がぼつりぼつりと語り出した。

先日、商品の企画を持ち込んだ革製品を扱う企業で言われた言葉に、千速は引掛掛かっているのだという。

初めての商談相手である武骨な中年の男は、千速の様子と手渡された企画提案書を見比べながら、小馬鹿にしたようにこう言ったのだそうだ。

『お宅みたいにお堅いとお堅いOLさんは、チェーン店の牛丼ひとつ食らったことないでしょ。そんなお上品なOLさんに扱ってもらうような代物は、うちでは取り扱ってないんでね』

「牛丼がなんぼのもんじゃない！」と、思ったわけよ。ファミレスならお手のもんじゃない、何が違うって言うんかいって。でも、食べてみようと思ったなら、なかなか敷衍は高いし」

千速は笑った。

「実際、お店に入って食べてみて思った。ま、牛丼を食べてみろって言われたわけじゃないのは、もちろんわかっている。でもねー、そうか、小綺麗な仕事の仕方をしているように見えていたのかなあって」

ちよつと反省、とため息を吐く千速の頭を、瑞穂は元氣出せ、というように、ぽんぽんと叩く。

二人で並んで店から出ると、瑞穂は手を伸ばし、千速の手を力強く握った。車までの短い距離を、手を繋いで歩く。

営業の仕事は、物を通した人と人との——価値観と価値観との——せめぎ合いだ。時として、それは気持ち削られるようなもの。そして結局は、自分自身と向き合うことになる。瑞穂はそれを

わかっているからこそ、何も言わずにただ、手を握ることで励ます。

手を放す前の一瞬、千速がその手をきゅつと握り返した。

それから、瑞穂を見て微笑む。

「ねえ、瑞穂。今日は初物尽くしで楽しかった。あの神社も、夜の初詣も、牛丼も」

「そうか」

口許を片方上げて、瑞穂は小さく笑った。

* * *

思いがけず、瑞穂に励まされてしまった。

自宅の前で、瑞穂の車のテールランプを見送りながら、千速はほっこりした気持ちになり——はた、と気付いた。

「——あ。『保険』のこと、聞きそびれたじゃないの」

2 然るべき方法

久々のデートから、それほど日を置かないある日。

「来週末は顔合わせだが、ちゃんと予定を入れてあるか？」

「……顔合わせって何の？」

夕食後、自室に戻ろうとした千速は、リビングで新聞を読みながら寛いでいる父、竜之介の言葉に振り返った。

「それは、うちと森のところだろうか？」

「はい？」

「瑞穂君から聞いていないのか？ 本来は結納をして然るべきところだが、婚約発表も済ませているし、指輪もお前に渡っているだろう？ だから、堅苦しいこと抜きで、簡単に顔合わせを兼ねた食事会でも、という話になっているんだが」

瑞穂がそれぞれの家に根回しをし了承を得ていたとはいえ、突然の婚約発表からこちら、年末年始の慌ただしさの中で、両家が改めて顔を合わせる機会はなかった。

もちろん「婚約」とは「結婚」を前提とするものなのだから、家を通さないことには話は進まない。

「……この間、一緒に初詣に行った時は何も言っていなかったけど。でも、わかった」

千速はくりりと父に背を向け、拳を握りしめた。瑞穂め。

——今度、顔合わせをすることになっている——

そう、ひとこと、私に言えはいいだけじゃないの？

舞台が全部整ってから、何も知らされないまま突然そこに引つ張り出されて、スポットライトを

浴びる——そんなのは、婚約発表の時だけで充分。逃げるつもりもない千速に対して、どうしてこう回りくどいやり方をするのだろう。

足音荒く自室に向かうと、千速はスマートフォンを取り出した。瑞穂からかかってくることはあっても、千速は滅多に電話をしない。いまだに瑞穂のスケジュールは過密で、通じないことが多いからだ。しかし、たとえ業務連絡のようであっても、メールは毎日やりとりしている。それなのに。

またしても、という思いに千速は唇を噛む。

対外的な婚約発表の後に顔合わせとか、順番が逆なんじゃないか、という突っ込みは置いておくとして。

電話でもメールでも構わない。何で「私に」言ってくれないの？ 私と瑞穂のことなのに。

『さっき父から聞いたんだけど、来週末両家の顔合わせなの？ 私、聞いてなかった』
怒りに任せて、用件だけのメールを瑞穂に送り付ける。

するとしばらくして瑞穂から、『そうだな』とだけ返ってきた。

そうだな、じゃないだろう、そうだな、じゃー！

『私に外せない予定が入っていたら、どうするつもりだったのよ』

『予定が入っているのか？』

『入っていないけど！』

『じゃあ、問題ない』

——む、か、つ、く。

とぎれとぎれのメールの応酬に、余計怒りが煽られる。電話して直接問い質してやろうか——千速はスマートフォンを握りしめた。

悪いことをしていると、思ってる？
それとも、ちっとも思わない？

自分の都合を優先して、千速を、千速の気持ちを蔑ろにしている、というのとはちよつと違うような気がする。どちらかといえば、先に周囲を固めて、用心深く囲おうとしているかのよう——
婚約といい、指輪といい、今回の顔合わせといい、千速には瑞穂がこんなことをする理由がわからない。大きく息を吐き、怒りを逃す。それから千速はスマートフォンを放り出し、混乱する気持ちを宥めるためにバスルームに突進した。

そして当日。顔合わせが行われるのは、都内の老舗ホテルだ。

千速と両親は緑豊かな庭園をそぞろ歩きながら、敷地内にある料亭に向かう。紅白の椿が美しく冬の庭を彩り、蠟梅の芳しい香りがどこからか漂っていた。

母に言われて、千速は振袖姿だ。しつとりとした濃い紫の地に華やかな扇文様が描かれ、そこかしこに白い小花が舞う優美で華やかな友禪。それに柔らかな橙色の飾り襟に帯揚げ、萌黄の帯締めを合わせ、どっしりした金の帯を締めている。アップにした髪は、白と橙色のつまみ細工の花かんざしで飾られた。

「二十六つて振袖には微妙な歳なんじゃないの？」

「派手な色柄じゃないし、大丈夫よ。演歌歌手は還暦近くても振袖を着ているもの」

いやそれは違う、と千速は思う。しかし、美しく装った娘を涙ぐんで見つめる父を見て、これも親孝行のひとつかしら、と苦笑した。

だが、父の涙には、若干別の意味が含まれていたようである。

「千速。無理してあんなのと結婚しなくてもいい——」

「あなた」

「だってそうじゃないか、千鶴さん。何なんだ、この囲い込むようなやり方は！」

「千速を想えばこそでしょう？ 瑞穂君は身動きが取れないからこそ、自分に出るだけの手を使って、千速への所有権を主張したのよ。可愛いじゃないの、必死で」

ふふふ、と母は笑った。

「いや、可愛くないぞ。腹黒いと言うんだそれは」

「千速がいいんだから、それでいいのよ」

いや、私も実際、納得しかねてますけど……とは、口に出来ない。そんなことをちらとでも匂わせたら、父はこれ幸いと千速を連れ帰りそうだ。

やり方は納得出来ないが、瑞穂と結婚したくないわけじゃない。

むしろ、一年離れていたことで、自分の瑞穂への想いを確信出来たのだ。瑞穂と共に歩む人生ならば、どんなことも乗り越えていけそうな気がする。

だからこそ尚更、こんなやり方に納得出来ないのだ。気持ちを試されているようで。仲良く口喧嘩をする両親の後に続き、千速は考える。

私の想いは、正しく瑞穂に伝わっているのだろうか――

料亭の門をくぐると、瑞穂と彼の両親は既に到着しており、控えの間で千速たちを待っていた。両家の両親はお互いに顔見知りのため、最初から打ち解けたムードだ。

「いや本日はどうも、加藤さん」

「お待たせしたようですね、森さん。今日はよろしくお願ひします」

先程までごねていた千速の父も、瑞穂の父、貴穂とにこやかに挨拶を交わしている。つまり、本気で反対しているわけではないのだ。娘を手放さなければならぬことが、少し淋しいだけで。

母たちはといえ、お互いに手を握り合い、本人たちそっちのけではしゃいでいる。

「気を揉みましたけど、いつかきつと、こうなるんじゃないかと思っていましたのよ」

「手出しをせずに、ぐつと我慢をした甲斐がありましたわね」

瑞穂はそんな両親たちの向こう側から、千速を真直ぐに見つめてきた。

千速は顎をつんと上げ、「まだ怒ってるんですけどー」という視線を返す。

それなのに、瑞穂の千速を見つめる視線が、柔らかく甘やかなものに変ったのを感じて、千速は思わず頬を染め――我に返った。

だめだめ、何やつてるの、瑞穂のペースに巻き込まれちゃだめよ。

片居が現れて「本日はおめでとうございます」と微笑み、一同を部屋へと案内する。集団の最後を歩く千速の隣に、さり気なく並んだ瑞穂が囁いた。

「――来たな」

来たな？ そりゃ、来ますとも。

片眉をはね上げた千速を瑞穂はじつと見つめて、それから少々ばつが悪そうな表情で、こう続けた。

「すっぱかされるかもしれないと思った」

例の『聞いてないんですけどー』のメールの後、二人の間のただでさえそっけないやり取りは、尚更そっけないものになっていた。

千速は足を止め、少し考える素振りをした。

「……その手があったか」

すると、数歩先に進んでいた瑞穂が慌てて戻って来て、千速の手をさっと掴む。

「何だ、悪いことしたって、ちゃんとわかってるんだ」

「……」

口を引き結んだ瑞穂に手を引かれて歩きながら、千速はくすりと笑った。

「どこかで似たようなセリフ聞いたね」

「――そうか？」

正確には『説教されるってわかってるんだな』だったか。あれはまだ瑞穂が桜井コーポレーショ

ンにいた頃だ。瑞穂を狙っていた笹川という女性社員が、彼と仲が良い千速に嫉妬して、嫌がらせのために会議室を勝手にキャンセルしたことがあった。専務の姪という立場を笠に着た彼女によって、それは思いの外大きなトラブルに発展し、その後始末のゴタゴタの中での瑞穂のセリフだった。「でも、すつぽかしたりしない。瑞穂のやり方には腹が立つけど、瑞穂を嫌いになったわけじゃないもの」

千速があつげらんと言つと、目を見開いて瑞穂が振り返つた。

「だけど、後で、きつちり、説明してもらいたいことがあるのよ。私、怒ってるんですけどもの」
ひとことずつ区切りながら強調して言つと、千速はするりと瑞穂から手を引き、袂を翻して両親の後を追つた。

全員が席に着くと、まずは瑞穂の父が口を切つた。

「加藤さん。この度はきちんとした手順を踏んでしかるべきところを、こちらの都合で振り回すようなことになってしまい、申し訳ない」

森一家は頭を下げた。

「いや、これは子供たちの望みでもありますし、済んだことです。あの状況では考えられる限りの礼を尽くしていただきました。それに関しては不問に」

千速の父は、慌てて先方の頭を上げさせた。

「それに、一昨年そちらの創立記念パーティーでこの二人が一緒に現れた時から、まあ、覚悟はし

ていましたから。でもまさか、こんなに早く千速を手放すことになるとは思いませんでしたがね」

些かやるせないため息とともに、千速の父は言葉を継いだ。

しかし桜湯が供されると、場の空気は一気に緩み、和やかに食事が始まった。子持ち昆布や蛤鯛などめでたい品々が次々と並ぶ。

「こうやって、無事めでたい日を迎えられて良かった。私の急な病のせいで、君たちには辛い思いをさせたね」

瑞穂の父は、千速の顔を見つめ、申し訳なきように口にした。

そして千速の両親に向き直り、こう続ける。

「瑞穂の少々強引なやり方に、気を悪くしないでやって頂けますか。あまりにも性急であるし、先方にも失礼だ、と咎めたんですが——」

仕方のないヤツだ、というように瑞穂を見やる。

「二人の馴初めというやつをコイツから聞かされましたね」

ぼろ、と千速の箸から鯛のお造りが落ちた。ゆっくり顔を上げると、瑞穂の父が口許をおかしそうに歪めている。千速はさつと頬を染め、正面の瑞穂に視線を飛ばしたが、本人は涼しい顔で箸を進めている。

おのれ、何をどこまで語つた！

「馴初め、とは？ 我々は娘から、同僚だったとしか聞いておりませんでしたか……」

千速の父が戸惑つたように問い返す。千速はそれ以上の追及を阻止すべく、慌てて父に呼びか

けた。

「あの、お父様っ！」

『危ない目』の詳細は、父にも兄にも幾分省いて伝えてある。手刀炸裂とか、男をオトしたとか、しかもそれを目撃されていたとか――

瑞穂の父は、頷いて続けた。

「実は、二人は十八歳の頃にパーティーで出逢っていたそうですよ。その時はお互い名前さえ交わさずに別れてしまつて、コイツは随分後悔したようです。以来ずつと探していたそうで」

千速さんは、あまりその手のパーティーに参加されなかつたそうですね、と瑞穂の父は動揺する千速に同意を求め、それから、ふうつとため息を吐いて続けた。

「私が倒れたことで、ようやく探し当てた女性から引き離すようなことになってしまったと思ひましてねえ」

く、黒い……。息子の無体を謝罪しつつ、さり気なく同情を引こうということか。

ちらりと自分の父を見やると、大きく頷いている。やだ、簡単に懐柔されちゃつてるし。

ソフトな印象ながら、かなりの策士だ。

瑞穂の真つ黒な血の源流を見た、と千速は思った。

二人の母たちも、目と目を見交わしてしみじみと頷き合っている。

「まあ、縁なんでしょうかねえ」

「こうして、まとまるべくしてまとまつた、というねえ」

瑞穂よ、よく頑張つた、的な空気が流れる。

いや、そこは是非、振り回された私に劳いのひとことを、と千速は密かに思った。

話題はその後、会社経営のこと、社会情勢のこと、瑞穂の今後など様々な方面に飛んだ。そして、二人の結婚式については、婚約もとりあえずしていることだし、また時期を見計らつて考えましよう、という流れで落ち着いた。

「私たちはもう少しゆつくりするから、あなたたちはお庭でも散策してらっしゃい。せっかく素敵なお庭なんだから」

食事を済ませると、寛いだ雰囲気の中、二人は外に追い出された。

* * *

瑞穂は振袖姿の千速と歩調を合わせながら、庭に足を向けた。

「こんな風に歩いていたら、お見合いしているみたいよね。ご趣味は……とか」
くすくす笑いながら千速が言った。

そうだ。何かのタイミングがちよつとズレていたら、千速はどこぞの御曹司とこつやつて見合いをしていたかもしれない。隣を歩く振袖姿の千速は艶やかで美しい。庭を彩っている赤い椿のように華やかで、白い椿のように凛としてゐる。加えてこの知性だ。断るような愚かな男はいないだろう。いもしない架空の男に対して、瑞穂の胸がチリと微かに妬けた。

「瑞穂は私の普段の姿を知っているからいいけど、こんなに『常ならぬ様子』でお見合いしたら、次に会った時がっかりされちゃわないかしら。詐欺だつて」

「見合いはしないんだから、そんなこと考えなくていい」

千速は口を尖らせて、一般論よ、と言う。

「そもそもお前は、仮にも見合いした相手に対して、次のデートにデフォルトの格好で行くつもりか？」

グレーのスーツに、銀縁メガネ、きつくひとつに結んだ髪で？

優雅に首を傾げ、千速はのたまった。

「会社帰りだったら、そんなんじゃない？」

「——そうなのか!？」

いや、それは相手もびっくりだろう。千速の外見だけでその気になったようなヤツだったら、腰が引けるんじゃないか？ 瑞穂は小さく笑う。馬鹿な男め。架空の、だが。

「じゃあ、瑞穂は着替えるの？」

「俺は着替えないだろう」

「だったら、私だつて着替えないわよ」

「女は普通、そういう予定がある日は、予めそれらしい格好をしているんじゃないのか？」

女性社員の、デートがある日の服装はそれなりにわかりやすい。千速は、眉を少し顰めて瑞穂を見た。

「私、会社帰りに瑞穂と会う時、それらしい格好してないね。もしかして、がっかりしてた？」

何だか物凄く可愛いことを言っているのだが、本人はわかっているまいだろう。それに、俺の目的は中身の方だから外側はどうでもいい——とは言えない。

「いや、あくまで一般論。そもそも、俺は最初からお前のデフォルトの格好しか知らなかったんだから。パーティーやデートや、今日みたいな日はオプション」

ぶ、と千速は噴き出した。

「オプションって。じゃあ、今度もう少しそれらしい格好を——」

「しなくていい」

「はい?」

「しなくていい」

瑞穂は言葉を重ねて念を押す。余計な心配事を増やすな。ワンピース姿で出社させた時のように、気を揉むのはたくさんだ。

ネイビーのさして派手ではないワンピースでさえ、千速をたおやかに美しく見せた。それをデー卜仕様の華やかなものにするど? そして、それで社内を歩き回り、営業に出歩くとか? やめてくれ、俺をおかしくする気か。

「いつもの、あの格好でいい」

「——あの仕様が瑞穂の好みなの?」

なわけないだろう! というセリフを呑み込んで、瑞穂は黙って足を早めた。

お前の、特別な美しさは俺だけが知っていればいいことだ。それを他人に見せびらかすのは、お前が確実に俺のものになってから。

「ちよっと待って、瑞穂。何照れてるのよー」
断じて、照れているわけではない。

* * *

庭園には大きな池があり、何か所か幅が狭まったところには、朱に塗られた反り橋が架かっている。

二人は、どちらからともなく手を繋ぎ、緩やかに弧を描く橋を渡った。

「ねえ、瑞穂」

千速は橋の下を群れて泳いでいく錦鯉を眺めながら、呼びかけた。

「今日は、休日で、大安でしょう？」

「そうだな」

広い庭園には二人のほかにも何組か、やはりお見合いなのか結納なのか、着飾ってそぞろ歩くカップルがいる。錦鯉から、それらの人々に視線を移して、千速は続けた。

「こんな日に、あの席を用意するには、結構前から予約する必要があるはずよね？」

森羅の力があれば、もしかしたら当日でも用意出来るのかもしれない。しかし、瑞穂や彼の父は

「そういった力の使い方を良しとしないはず。」

「まさか、年末に思い立って、そのまま予約しましたってわけじゃないでしょう？」

「まあな」

それに、それぞれが忙しい人たちなのだ。スケジュールの調整だって簡単ではないだろう。つまり、それなりに前から、今回のことを計画していたということだ。

「——どうして？」

何でもないことのように答える瑞穂の前に、千速は回り込んだ。

そんな、どうでもいいことみたいに流さないで。

千速は片手を腰に当て、瑞穂の胸元に指を突き付けながら問い詰めた。

「どうしていつも、肝心の私をすっ飛ばしたところで話が進んでいくのかしら。百歩譲って、婚約発表の時のことは仕方ないとする。あの時は色々事情があったから。でも、指輪だって、今回のことだって……」

すると突然、指を突き付けていた手首を瑞穂にくつと掴まれ、引き寄せられた。

いつものように余裕の表情で、俺様なセリフを言い放つ瑞穂を予想していた千速は、自分を掴んだ手の強さと、間近に迫った彼の目に浮かぶ仄暗い感情に戸惑う。

「……瑞穂？」

「……お前、自分がどれだけ話題になっていたのか知っているか」

「話題？ 会社では色々言われていたみたいね。竜兄がお相手することになっていたり」

「そうじゃない。こつちの世界でだ。お前、俺と会えない間にせつせとパーティーに顔を出しているだろう」

その声に苛立ちを感じとって、千速は目を瞬かせた。

「せつせとじゃないけど、お父様に言われて、まあ、それなりに」

父や童海にエスコートされて出席したパーティーは、それほど多くはなかったはずだ。どれもこれも似たようなものばかりで、似たような話題を語る、似たような人々ばかりが集うものだった。「神世建設社長令嬢」としてそれらの人々に認知してもらうため、父や童海の傍らに微笑みながら立ち続けていた。けれど話題になるようなことを、果たして自分はしただろうか――

「俺は神世建設社長令嬢の噂を、よく聞いた。どこぞの銀行頭取の息子でエリート官僚の男が口説いているとか、どこぞの政治家のボンクラな三世が熱を上げているとか」

千速は首を傾げた。誰の話ですって？

「――思い当たりません」

「お前は、そういうヤツだよ。相手に関心がないから、相手に関心を持たれていることにも気付かない」

そう言つて瑞穂は掴んでいた千速の手を放し、数歩後ずさると、ふいっと視線を逸らして髪をかき上げた。

「だがもし、会えない間にお前の心を捉えるようなヤツが、ひよっこり現れたら？ 俺はそれに対抗する手段がない。メールだとか電話だとか、そんなもの直接会うことに比べたらたかが知れてい

る。お前はそんな馬鹿なこと言うかもしれないが、俺には確信が持てなかった。だから、見苦しく足掻いたんだ。俺の手の届く範囲で、出来得る手を全部打つことに決めた。まずは俺の親だ。それから千速の両親」

ポケットに手をつ込み、ちらりと千速に視線を流して続けた。

「お前の親父さんには少し手こずったが、お袋さんには大分助けてもらった」

お母様まで抱き込むとは。まあ、お母様の場合は自ら進んで抱き込まれた感があるけど。

「親を懐柔したら、次は千速を確実に手に入れる算段だ。出来るだけ早い方がいい。他所のヤツが千速の外側を飾っているものだけに目を奪われているうちに。お前の、その中身が特別仕様だったことに気付く前に。それなのに、お前ときたら……。そうだ、確かに俺は焦っていた。クリスマスパーティーで婚約発表を強行するほどには」

再び千速の正面に立って、自嘲するように瑞穂が言った。

「格好悪くて幻滅するか？」

千速は、呆気にとられて瑞穂の告白を聞いていた。俺様瑞穂様は、事の進め方も俺様だが、告白の仕方も俺様だ。

――何だろう、これは。

ものすごく婉曲に、とても想っていると言われている気分だ。えらくわかりにくいけれど。千速は、首筋から熱が上がってくるのがわかった。何というか、照れくさい。というか、恥ずかしい。ストレートに言ってくれたら、もっと応えようがあるのに。

「——嫌か」

「は？」

「俺と結婚するのは、嫌か？」

「嫌じゃなければ、どんなやり方だっていいだろう、つて理屈？」

千速は少しムツとする。会えない間、瑞穂のまことしやかな噂を聞いたのは千速だって同じだ。不安になったのだってそう。

それでも、瑞穂が「好きだ」と言ってくれたから。

「必ず迎えに行く」と言ってくれたから——

ああ、そうか。

瑞穂の強い視線を受け止めながら、突然、千速は腑に落ちた。

私が——私の方が、この人に、きちんと言葉で伝えてこなかったのだ。暗がりの中抱き合いながら、お互いの熱に浮かされて囁いた言葉など、白日の下に晒されたら、何とも頼りなく儂い……

「理解しました。たぶん、私も悪かったのね」

千速は、目を伏せ小さくため息を吐いた。こんなやり方を瑞穂にさせたのは、千速にも原因がある。

何のことだ？ という顔をする瑞穂を、千速は真直ぐ見つめる。

「こんなところで顔合わせまで済ませた後に言うのもなんだけど、私は、結婚してくれとも結婚しようとも言われていないのよ？」

「指輪を渡した」

「指輪はっ！ 指輪は渡されたんじゃないやなくて、気付いたら嵌められていたのよっ！」

口にしなから、その状況を思い出してしまい、千速は頬を染めた。

「何、赤くなってるんだよ」

瑞穂がニヤリと笑った。

「う、煩いよ、瑞穂っ！」

赤面しながらも、千速は瑞穂から視線を逸らさずに見つめた。ちゃんとわかってもらうのだ。

「こんな風に外堀を埋められて、追い込まれていくようなのは嫌。だって、私は自分で瑞穂を選んだんだもの。流されていくんじゃないやなくて、自分の意志で瑞穂の隣に立っていたい」

一瞬目を睜った後、今度は、瑞穂が顔を赤らめた。

「お前……」

しかし、千速が徐に指輪を左手から引き抜くのを見ると、その顔が強張り唇が引き結ばれる。

「はい」

指輪を瑞穂に突き出して、千速は言った。

「もう一回、やり直させてあげる」

「は？」

瑞穂が目を瞬かせた。

「ほら。手を出しなさいよ」

千速は戸惑う瑞穂の手を取ると、その掌に指輪を置いた。それから、その端正な顔を見上げる。「ちゃんと言葉で言つて。そうしたら、私も言葉で答えられる。そんなのでお互いの不安が全部なくなるわけじゃないけど、積み重ねていけば、いつかきつと確かなものになる。だから、ちゃんと言葉で言つて」

千速は、掌の上に置かれた指輪を見つめる瑞穂から、一步離れた。

瑞穂は暫くそのまま立ち尽くしていたが、「……全くお前には敵わない」と呟いた。それから、掌の指輪を一瞬ギョツと握り、顔を上げてニヤリと笑う。

「この指輪、お前みたいだろうか？」

私みたい？ 千速は首を傾げる。

瑞穂は、親指と人差し指で指輪をつまみ、陽の光にかざしてそれを眺めた。きらり、とダイヤが輝く。

「シンプルで、媚びないデザインだ。不思議だよな。これといった特徴があるわけじゃないのに、たくさん並んでいる指輪の中で、俺には『これだ』とわかった」

それから、千速に向き直つてこう言った。

「千速。俺と結婚するだろうか？ 変なムシがつかないように、これをちゃんと嵌めておけ」

「……素直に『はい』って言いたくなくなるようなセリフよね」

くすりと笑い、呆れたように呟く千速の左手を、瑞穂はすつと掬い上げた。

視線を上げると、今しがたの俺様な言いようが嘘のように、真摯な眼差しが千速を見下ろして

いる。

「——千速。愛してる。結婚してくれ」

言葉には、形がない。けれども、千速はその言葉が、今日のこの初春の陽射しのように、ゆつくりと心に降り注ぐのを感じた。降り注いで、こんなにも心を熱くさせる。何の飾りもない言葉なのに、何故だろう、涙が溢れそうだ。

思わず、自分の左手を支えている瑞穂の手を、きゅつと握った。

「——はい。はい、喜んで」

* * *

瞳を少し潤ませて、花が綻ぶように微笑んだ千速に、瑞穂は一瞬見とれた。なるほど、自分はこの表情を見逃してしまうところだったのか——

しかし、すぐに我に返つて、その薬指に指輪を押し込んだ。つい、「……心臓に悪い。突き返すとかするか、普通」と呟いたが、千速は聞いてないようだ。彼女の行動は、本当に予想がつかない。千速は再び左手の薬指に嵌められたそれを、先程瑞穂がしたように日の光にかざしながら、くると回った。瑞穂の前で手を空に差し伸べ、袂を翻す様子は、紫の鮮やかな蝶のようだ。しかし、その蝶はもう瑞穂のもとからどこかへ飛んでいくことはない。美しい枷を嵌められたから。

紫の蝶は、しばらくその指輪の煌めく様を眺めていたが、徐に振り向いて瑞穂のところへひらひ

らと舞い戻ってきた。そして、今度は何だ、と構える瑞穂に向かつてこう尋ねた。まるで、うっかりしてたけど、とでも言うように。

「瑞穂。私も瑞穂を愛してるって言ったかしら？」

「――初耳だな」

捉えられたのは、自分の方だ。

瑞穂は、くくく、と笑いながら千速の手を再び取り、ゆつくりと歩き始めた。

座敷に戻ると、両親たちの何やらもの問いた気な視線が、一気に二人に向けられる。

「なあに？」

千速が、瑞穂の隣で首を傾げた。

「いや」

千速の父が、口籠る。

「その、何だな、瑞穂君。色々、よろしく頼む」

「……いえ。こちらこそ、よろしくお願ひします」

そう答えながら、瑞穂も首を捻った。その視線を捉えた瑞穂の父が、面白そうに口にする。

「ドロウか？ いやいや。どちらかといえば、千速さんが手堅く勝利した、という感じかな？」

瑞穂と千速の視線が、さつと座敷の奥の窓に向けられた。

大きく開け放たれた障子からは、庭園が一望出来る。先程二人が立っていた朱塗りの反り橋も見えた。

「やだ、もう……」

頬を赤らめた千速が、ぐいっと瑞穂のスーツの裾を引き、その胸元に顔を埋める。

瑞穂も気恥ずかしくなり、思わず視線を逸らした。

和やかな笑いの中、顔合わせは無事終わったのであった――

3 チョコレート狂想曲

「それで？ バレンタインデーはどうするの？」

バレンタインデーを翌週に控えた月曜のランチタイム、実里がにんまり笑いながら尋ねた。

ブリの照り焼きを口にしながら、千速はそうねえ、と首を傾げる。

「昨年は、スーパーで買ったチョコの詰め合わせだったけど」

気軽に手元に置いて、疲れた時に口にしてほしいから……という理由で選んだものだった。

「はい、はい、しかも宅配で送り付けてね。あたしや、その箱を開けた時の瑞穂が見たかった」

「こんなのももらったの、初めてだと言ってたな」

春巻きを頬張りながら、実里は頷いた。それはそうだろう。ひと粒数百円の、伯爵夫人や、シヨコラティエの名が冠されたようなブランド物が相応しそうな瑞穂なのだ。ひと箱数百円ちよいのチョコレート、それも大量に贈ろうと考える勇者は、千速を置いていないだろう。

「美味しかったって言ってたわよ。メイド・イン・ジャパン、さすがよねえ」

いや、それは、「千速からもらった」という付加価値が付いての感想なので、と実里は苦笑する。

「そもそも、今までチョコレートをもらうことはあっても、あげたのつて父と兄にくらいだったから」

そう言つて、千速は青菜の胡麻和えを口にした。

「もううこと？」

何か面白いこと聞こえましたか？ というように実里の眉が上がる。

「女子校時代、紙袋いっぱいになるくらいには」

「……」

「兄には、全然敵わなかったけど」

「そこは、もともと競争するとこじゃないから」

すかさず突つ込む実里を軽くスルーして、千速は呟く。

「去年は陣中見舞いの意味合いが大きかったし、事情が事情だっただけに喜んでもらえたような気もする。でも、今となつては、チョコレートを受け取つて喜ぶ瑞穂が想像出来ない」

というのも、瑞穂は桜井コーポレーションに在籍していた三年間、バレンタインデーのチョコレートを全く受け取らなかつたからだ。それはもう徹底していて、直接押しかける者には冷たい一瞥で「受け取れない」のひとことを投げつけるのみ。机の上に置かれていたものに関しては、総務

に「忘れ物」として届ける周到さ。「そこまでやる？」という司の言葉に、「よく知らないヤツにもらったものを口にする気になれない。誰からもらつたかわからないようなものは尚更だ」と言い放つた。当時、完全に傍観者だった千速は、その徹底したやり方を半ば呆れ、半ば感心して眺めていたのだ。

「確かに」

当時の様子を思い出したのか、春雨の中華サラダに箸を伸ばしながら実里は頷いた。

「でも、金曜だし？」

もちろん、瑞穂のところに行くんでしょ？ と暗に含ませて千速の顔を覗き込む。

「……そうだね」

「そうだね、じゃなくて！」

千速は少し困つたように微笑んだ。一応婚約者という立場ではあるけれど、瑞穂と二人の時間を持つのはやはり難しいのだ。「一年前の約束通り、持ち主に」と言われて、森羅のクリスマスパーティーの夜、瑞穂のマンションの鍵は再び千速の手元に戻ってきた。顔合わせでは、指輪は然るべき言葉付きで、千速の指におさめられた。

けれども。

忙しい彼の時間に自分がどこまで踏み込んでいいのか、千速にはよくわからなくなっていた。

「……お互いの気持ちは変わっていないって確認出来たはずなんだけど、一年前突然途切れたところからまた同じ状態で始められるかっていうと、そういうわけじゃないというか。状況も変わって

いるし、距離感が狂っちゃったのかな」

呆れた、というように、盛大に実里が嘆息した。

「あのさ。ここにいて毎日顔を合わせていた時だって、瑞穂はアンタの気持ちを掴み損ねてイライラしていたわけだ。ましてや今は、物理的な距離が出来ちゃったわけでしょ？ ああいった立場になった以上、瑞穂はいつでも忙しいから、時間的な意味でもだわね。せめてさ、こういうイベントの時くらい、もっとわかりやすくアンタの気持ちをヤツに伝えてあげたらどうなのよ？」

「わかりやすく……」

『婚約者』って立場なんでしょ？ しかもマンションの鍵を渡されている。それは、いつでも来たいってことなんじゃないの？ 誰に何を遠慮するっていうのよ」

「主に瑞穂に……」

はん、と千速のセリフを鼻であしらって、実里は続ける。

「ブランクがあるからこそ、瑞穂は必死こいてアンタを囲おうとしているんじゃないの。そうさせてる本人が遠慮してどうするのよ。アンタ、ちゃんとわかりあうには、一緒にいる時間を持たないといけないって理解したんじゃないかな？ 瑞穂が動けないんだから、アンタが動きなさいよ」

そう言っつて、実里は卵のスープをすすった。

「金曜日行っつて連絡しなさいよ。『行っていい？』って聞くんじゃないよ、『行く』って言うのよ。そこ大事なんだから、わかつたっ？」

全く世話が焼けるっつと、呟いて実里はスープカップを置く。しかし次の瞬間、再びにんまり笑っ

て身を乗り出した。

「作戦を授けて進ぜよう。題して『チョコレートは私』作戦」

「……何だ、それ」

味噌汁を口にしながら、千速は顔を顰めた。

「谷口軍曹直々の作戦伝授であるぞ。心して聞くのだ、加藤一等兵」

「軍曹なんだ。微妙な階級だね。で、私は部下で一等兵なわけね」

文句を言わないっ！ と実里が人差し指でピシッと千速をさした。

「大将を騙るほど、私も経験値が高いというわけではないのだ」

情報は割と豊富だけだね、主に常務経由で、と胸を張る。

「そこ、胸張るとこじゃないし」

「謙虚は美德なのだ」

「……はいはい」

そこで千速は、実里から「作戦」と称する、有用性に果てしなく疑問符が付くいくつかのアドバイスを授けられた。

そして、バレンタインデー当日。

千速は仕事をほぼ定時で切り上げ、スーパーで色々買い込んでから瑞穂のマンションに向かっている。